



## 公

開中の「オペレーション・ミンスミート」は、第二次世界大戦中の実話をもとにした映画です。舞台は1943年、戦争が激化してナチの勢いが増し、世界の未来が真っ暗だった時代のロンドンです。

とはいえ爆撃や戦闘のシーンはあまり出てこなくて、ヒトラーをだますための作戦を徹底的につくり込んでいく頭脳戦の経緯が描かれます。死体を高級将校に仕立て上げ、偽の文書を持たせてナチ圏内の海岸に漂流させる。そんな荒唐無稽なウソを真実と信じ込ませるために、恋人の写真や手紙、財布の中のゴミ（レシートとか）にいたるまでとことん「リアル」につくり込まれる。そうして完璧なウソができ上がったとしても、相手がそれをどう受け止めるかはわからない。

い。ウソと見抜いたうえでわざと騙されたフリをする可能性だってあるのです。

実行するほうにとっては胃が痛くなる作戦のアイデアを思いつくのがイアン・フレミング少佐で、作戦の上司がジョン・ゴドフリーっていうのもシビれます。フレミングはこの戦争後、ジェームズ・ボンドシリーズを書き、ゴドフリーは「M」のモデルになるのです。スパイ映画ファンにはたまらない世界です。

さて、捏造や騙しや裏切りや駆け引きがこれでもかと展開される映画なのですが、人間の「真実」もさり気なく描かれています。

まずは「人は慣れる」という真実。戦争の真つ最中でも、人々が仕事後にダンスホールで楽しんでいる様子が描かれます。戦争も3年目くらいに入ると、「ウィズ・ウォー」とい

う生活になっていくのですね。コロナ禍も2年経つと、まん延防止が出ても繁華街が賑わっている「ウィズ・コロナ」状況と似ています。どんなにひどい状況でも、長く続くと人間は慣れてしまい、そこに「新しい日常」をひねり出すようです。

もうひとつは、グレーゾーンを保ち続けられる男は「罪つくり」だけど強いという真実。白黒つきたい女は去るしかないけれど、グレー領域をずると引きのばせる男はなんだかんだとその立場を仕事にも活かして生き残る。憎らしさと憎めなさの間で揺れ動く「天然スル男」をコリン・ファースが絶妙に憎たらしく演じています。

白黒決着志向は、こと大人の人間関係に関する限り、持続可能ではありません。あいまいなグレーを保ち続けることに耐えうる力を身につけたいものです。

Theme

持続可能な  
グレーゾーン

05  
Lifestyle

男たちよ目覚めなさい

イラスト/ユリコフ・カワヒロ



カトリーヌ10世 Catherine X

Profile グローバル化が進む  
社交界事情にも通じる。  
密かな趣味は人間観察とコスプレ。  
好きな飲み物はモンラッシェ。  
日本ではほとんど知られていない、  
ある小国の女王とのウワサも!